國學院大學學術情報リポジトリ

書評 山本信吉著『貴重典籍・聖教の研究』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 嵐, 義人, Arashi, Yoshindo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000037

〔書評〕

山本信吉著 『貴重典籍・聖教の研究』

嵐 義人

本書は、山本信吉氏の六十年に亘る研究者生活の根幹をなす典籍調査、殊に国宝・重要文化財の指定、あるいはそこへの準備段階の調査報告を纏めた書であり、分かりやすく、また読みやすい文章で綴られており、特に書誌学的事項については詳細に記述されている。

本書の構成は、二部だてとした上で全十二章から成っている。次にその章題を摘記する。

序章 我が国の古典籍の伝来
第一部 典籍の部

- 第一章 東大寺奴婢帳の擬古文書
 - 第二章 半井家本『医心方』
 - 第三章 来迎院伝来の『日本霊異記』
 - 第四章 文化財としてみた松本市所蔵の『宋版漢書』（慶元刊本）
 - 第五章 『中院一品記』原本の書誌的考察
- 第二部 聖教の部
- 第一章 奈良時代書写の聖語藏『華嚴経』
 - 第二章 聖語藏『大方広仏華嚴経』（新羅写経）
 - 第三章 青蓮院門跡吉水藏の聖教

第四章 高野山正智院の聖教

第五章 我が国における印刷文化の発達と高野版の版本・

板木

●第六章 尊性法親王消息鬘撰法華経

第七章 日本印刷文化と伊予国光明寺所蔵の『版本五部大

乗経』

。は国宝指定、●は重文指定

これらの概要を記すなら、序章は漢籍・仏典・国書の伝来についての概説であり、後半は特に家学について指摘している。概説ゆえ、清原家について系譜上平安前期に活躍する舎人親王直系とは別の系統らしいということなどには触れないが、我が国の学問と典籍の関係を一瞥できる記述と言えよう。なお個人の希望としてはここでは名家・半家などにも触れてほしかった。

第一部は「典籍の部」であるが、陳列ケースの外から眺めるだけでは分らぬ、当事者として直接手に触れ、既往の研究や伝来の経緯を確認しつつ理論固めして行く一端、また主要なプロセスが、明瞭に示されている。陳列ケースの裏に潜むドラマというべきか、その秘められた歴史までが山本氏の手で明らかに

されていく文章でもある。

第一章「東大寺奴婢帳の擬古文書」は、山本氏の文化財保護委員会勤務の初年に寓目した文書を根気よく究明した論考である。東大寺奴婢帳自体、社会史の貴重な史料であり、文書の形態を分りやすく説明している。個人的感想としては評者の師瀧川政次郎博士の『日本奴隷経済史』（評者はその増補版に関与した）に繋がるものであり、また擬古文書の存在と実態を説く記述が注目される点に惹かれる。

第二章「半井家本『医心方』」は、該書の影印（六冊）の刊行に際して附録として出版された解説（『医心方の研究』所収）であり、半井家が幕命に背いてまで既に焼失との虚偽の申告をして秘匿したほぼ平安書写の全巻（全三十巻、うち一巻は流出するも現存）についての詳細な研究であり、調査報告である。また家学に対する当該家内外の認識やその家の証本を保存・襲蔵することなどにも触れている。

第三章の「来迎院伝来の『日本霊異記』」は、職務上の調査に附随して見出したとはいえ、山本氏によって発見された新出本であり、上巻を欠き、中・下巻も残欠であるが、平安後期書写の中・下巻最古本（上巻にはより古い興福寺本が知られている）である。江戸後期には、現在よく利用される狩谷棊斎の『日

本靈異記攷証』などもあるが、本書を無視することはできない。

第四章「文化財としてみた松本市所蔵の『宋版漢書』（慶元刊本）は、姑く所在不明であった狩谷棧斎旧蔵本であり、長澤規矩也博士との縁もあつて調査した結果、直ちに重要文化財として指定されたものである。三史（史記・漢書・後漢書）の写本は我が国には数多く存するが、真正の宋版となると流石に少ない。このあたりの概観は第二節に要領よく纏められている。また第五節刻字の字様も版本史の上から看過し得ない。

第五章「中院一品記」原本の書誌的考察」は、古記録專攻者の一度は手を染めてみたい夢をなぞられた論文である。その上『大日本史料』が江戸期の写本を用いているのに対し、齋木一馬氏の指摘があるとはいへ、自筆原本を詳細に調査された意義は小さくない。

次に、第二部は「聖教の部」であるが、「聖教」なる用語は『日本古典籍書誌学辞典』に項目すら立てられていない。しかし第二部第三章吉水院の聖教中には、「安慶所伝聖教等」、「桂林蔵聖教法門秘決等相承」、「大師（最澄）正嫡法門聖教等悉以相承之」など見え、大正期の岩橋小彌太博士の文章中にも見られ（後述）、文献上の裏付けも存する。したがって、『日本国語大辞典』が言うが如き「①聖人の教え。特に、孔孟の教え。

③仏教をいう。」とは異なり、仏教教派における正当性を示す蔵本・文書類をいう用語である。かかる「聖教」のもつ意義、伝襲の由縁、教派の争いに関わる複雑な異本などを明らかにされた山本氏の論考が纏められており、第一章から第四章はまさに「聖教の研究」と称すべきものである。そして第五章以下は寺院印刷史の研究であり、板本について纏められている。

第二部第一章は「奈良時代書写の聖語蔵『華嚴経』」であり、東京国立博物館法隆寺宝物館所蔵の二種の華嚴経を対象として、まずは書誌学的に考察を加えた報告である。なお華嚴経の「華」と「花」が六十巻本と八十巻本に対応するとの指摘は、さらに深い由来と結びつくようであり、読者を惹きつけるものがある。また、この料紙の紙質について「調査員の永年の経験に基づく肉眼および触指感覚を中心として行い」と見える点には、評者など経験未熟な者の常に悩むところであり、研究者によって説の分かれるところであるが、山本氏の以下の記述は首肯されるところが多い。

第二章「聖語蔵『大方広仏華嚴経』（新羅写経）」は、第一章と対をなす調査・考察であり、東大寺図書館蔵正倉院聖語蔵の経卷中より特に考察の対象とし、書誌学的検討の結果、当該書のもつ特色・特異なる点、成立事情等を指摘されている。そし

て両章の価値は、しっかりと書誌的報告であると共に、聖教の書写・伝襲の事情・経緯の究明にあると見られる。

第三章「青蓮院門跡吉水藏の聖教」では、具体的な典籍についての書誌学的考察はなく、青蓮院法統の歴史と吉水藏の歴史ならびに吉水藏の構成などの現状について詳述している。平成元年の文化財指定十点については、何点か書誌学的調査報告がほしいところであるが、成果として目録が刊行されたことは喜ばしい。

第四章「高野山正智院の聖教」も亦、正智院の法流・経蔵を中心とした正智院の歴史と同院襲蔵聖教の概要を纏めた一篇である。三部分からなり、聖教の歴史、聖教の概要、法流の成立を紹介・考証するが、前章と並び、聖教伝来の実態と意義を見る上で恰好の対象についての評論であり、山本氏の言の如く我が国聖教史研究の観点から価値ある一篇といえよう。

第五章「我が国における印刷文化の発達と高野版の版本・板木」は、第二節で印刷文化史を概観し、最後には印刷に関する用語と板木について簡潔に略述している。第三節は高野版の歴史で、鎌倉期を中心に、江戸期までを概観するのであるが、中間に「正安二年印板目録」の影印を九ページに亘り挿入している。

第六章は「尊性法親王消息鬘摺法華経」で、山本氏が指導を受け、評者も晩年に指導を受けた岩橋小彌大博士が大正八・九年に調査された向日町真経寺の寺宝について述べている（『京畿寺社考』中で、「聖教類」と書かれ、寺宝中に「摺写法華経（尊性法親王消息繡写）十卷」とある版経について、紙背の自筆消息も含めて山本氏が行った書誌学的調査の報告である。「鬘摺」は繡刻の摺経をいうのである。『日本古典籍書誌学辞典』には見えないが、重要文化財の登録台帳には章題の如く記されている（なお「開結共」が附記されている）。

第七章「日本印刷文化と伊予国光明寺所蔵の『版本五部大乘経』」はむしろ山本氏の原著『古典籍が語る―書物の文化史―』にふさわしい論考であるが、成稿が前著より遅いため本書に収めたのではないかと推測され、前著第三章に続くものと見られる。それと共に本書を翻く人は、前著をも併せて通読するべきであろう。そこから、より深く我が国の印刷文化史（その中には中韓印刷文化受容史も含まれる）、就中、聖教類の果たした役割の大きさが知られよう。

以上、全て分かりやすく述べられているのであるが、このように纏めてみると極めて専門的であり、難解と見られかねないが、その点は評者の力量不足によるものであり、ご寛宥を請う

ほかない。なお本書は多くが調査報告の段階で終わっており、文献学的研究との関係が補註などに記してあればより価値を高めたものと惜まれる。ともあれ、限られた紙数の中で一わたり概略を紹介し、若干の評語を挿んだ次第である。

山本氏とは個人的には文部省・文化庁での先輩・後輩という関係で、特に文部省院友会を通じてよくお会いしたのであるが、むしろ師瀧川政次郎博士との関係で文部省以前から既知の先輩であった。明治後期より戦前にかけての文献史家・神道史家にして永く史料編纂官であった山本信哉博士のご子息でもある。特に瀧川博士は九州帝国大学助教授に任じられた大正十四・五年のころ毎週のように史料編纂所に通っており、山本博士の指導を受けていたという。山本信吉氏は國學院大學ならびに同大學院に学び、岩橋小彌太・坂本太郎両博士らの指導を受けるなど文献研究の基礎を修められた。ついで文化財保護委員会に奉職し、そのまま文化庁調査官に移行、書跡・典籍・古文書部門一途の道を進まれ、田山信郎・是澤恭三両氏らの薫陶を受け、多くの文化財指定に関与された。文化財保護委員会の建物は、もと国史編修院などが置かれた江戸城外堀の石垣を残す古い建物であったと聞いているが、その数少ない生き証人の一人でもあった。本年二月にご逝去なされたと仄聞する。手向け

草にもならぬ雑文であるが、これを捧げ、謹んで学恩を謝しご冥福をお祈りする。(A5判、三八〇ページ、吉川弘文館、平成二十五年八月発行、定価一三、〇〇〇円+税)